

教育目標

自ら考え主体的に学ぶ生徒
明るく思いやりのある生徒
健康でよく働く生徒

学校だより「岩瀬ヶ丘」



第32号

平成29年 2月19日発行

須賀川市立第二中学校

☎75-2910

発行責任者：校長 高崎則行

集団の質が個人の成長に与える影響が大

以下に記載する資料は、3年生には時期的に遅いのではないかと考える方もいるでしょう。しかし、この資料は3年生には5月頃に提供したので、読んでくれた生徒もいるのではないのでしょうか？



「いじめ」や「仲間はずれ」のあるクラスでは、志望校に対してもうひと頑張りという生徒が不合格になり、逆に、「みんなで頑張りよう」という雰囲気のあるクラスでは、もうひと頑張りの生徒たちがみんな合格する。こういう傾向は、多くの先生方が実感していることです。

皆さんは、雁（かり）という鳥を知っていますか。この鳥は、秋が深まった頃に、冬を越すため南に向かって飛んでいきます。私も25年以上も前に、この須賀川市のある中学校の校庭で一段と寒さが増してきた夕暮れに、「V」の字に連なって飛んでいくのを見たことがあります。

「V」の字に連なっていくのには、科学的な理由があります。

前の雁が羽ばたいた後ろには、上昇気流が生まれます。それが「V」の字に広がるので、後ろに続く雁はその上昇気流の上をなぞるように飛ぶと体力の節約になります。後続の雁は鳴いて前の雁を励まします。興味深いのは、その後です。先頭役は決して群れのリーダーとは限らないのだそうです。疲れると最後尾に回って、別の雁と交代します。こうして、「V」字に連なって交代を繰り返しながら飛ぶことで、一羽で飛ぶよりも1.7倍も遠くに飛ぶことができるという観察結果もあるようです。もっとすごいことがあります。脱落して群れを離れた雁が出たときには、それに寄り添う仲間が現れるのだそうです。

さて、皆さんのクラスでは、先頭に立ってクラスを引っ張ってくれる人は誰でしたか。その人がたいへんなときに代わって先頭に立ってくれる人は何人いますか。また、先頭に立つことはなくても、困っている人にそっと寄り添っている人はいましたか。

そういうクラスは、一人一人の成績が向上します。「誰に対しても分け隔てのない明るいあいさつをする」ことから始まって、日常の学級の雰囲気づくりの先頭に立つ。授業に真剣に参加して、いつしかみんなの熱心な活動を引き出している。家庭学習の効果的な方法を工夫して、それを紹介して互いに高め合うきっかけを作っている……。そうして、いつも誰かがクラスを引っ張っている。だから、「受験勉強は、個人戦ではなく団体戦。」なのです。これは、受験勉強に限らず、家族も部活動も、仕事も同じではないでしょうか。

私が中学3年生の時、担任の先生が私たちにこう言いました。

「君たちは全員合格するよ。自習時間に代わりに来た先生がみんな言っていたよ。3組（私は3年3組でした）は、いつ行っても静かに勉強ができるって。それだけじゃないんだ。誰かが「教えて」って言うと、すぐに教え合う輪ができるって。こういうクラスは、危ない人も合格するクラスなんだ。」

実際に、私のクラスは38名全員が合格。4名は、いわゆる「就職列車」で名古屋の工場に集団就職しました。当時はそういう時代でした。また、学級の生徒数の上限は45名だったんですね。

3年生には残りわずかな期間を、心ひとつにして有終の美を飾ってほしいと思います。また、1、2年生にはこれからの学校生活、学級生活に参考にしてほしいと考えています。

授業参観、学年保護者会への参加 ありがとうございました



2月8日(木)には、本年度最後となる授業参観に多数のご参加をいただきまして、ありがとうございました。

回を重ねるごとに対話を重視した生徒主体の授業が多くなってきたと、私は実感しています。みなさんは、どうお感じでしょうか？廊下からそっと見守っている保護者の方もいらっしゃるようですが、今回は、教室の前のドアからでも、うしろのドアからでも結構です。教室に入って、そういう視点から生徒たちの学習活動をご覧になってください。

また、学年懇談会は、年度末の締めくくりと、進学・進級に関する話を中心に進められました。希望や目標を持って進学や進級の準備ができるよう、ご家庭でもお子さんの考えに耳を傾け、親としての考えを伝えてみましょう。

ことばの力⑩ 登下校見渡す限り稲の波

平成29年度須賀川市俳句ポスト第2回入選句に選ばれた3年 安藤歩幸(あゆみ)さんの作品です。実りの秋を迎え、登校するときも下校するときも視界一面に田んぼが広がり、稲穂が波のようだというのです。

下五が「稲の波」と、体言止め、比喩表現になっています。「稲が波のよう」と直喩を使った場合と、このように「稲の波」と隠喩を使った場合の印象の違いを比べて効果を味わってみましょう。「稲」と「波」が表面的に似ているのではなく、直喩では本質的な共通点が強調されます。私は、波と見まごう稲穂の動きから頭を垂れんばかりの実りのよいそれを連想します。また、波のうねりが継続的に移動していく様子を想像し、広大な田園を隅から隅まで吹き渡る風の動きさえ見えるような錯覚にとらわれます。体言止めは、しばしそのイメージの余韻に浸らせてくれます。

作者は、そのような自然の恩恵を受けた豊かな大地を貫く通学路を毎日とおって須賀川二中にかよっているのです。上五の後に句切れを設け感動の中心を「登下校」に置くことで、自然豊かなふるさとへの愛着、そんな通学路を通る喜びまで想像できます。そう言ったら深読みし過ぎでしょうか。

この学校だよりは、本校HPからもご覧いただけます。

ジャガイモによる食中毒予防

「かんぷら」は、福島県の方言でジャガイモのこと。小ぶりのジャガイモを油で揚げて甘塩っぱい味噌をからめた「味噌かんぷら」は福島県の郷土料理です。

さて、内閣府などが「ジャガイモによる食中毒を予防するために」として、次のような注意喚起を行っています。

調理して食べる時の注意点

【調理】

- 1 芽はまわりの部分も含めて取り除きましょう。
- 2 皮はできるだけむきましょう。特に緑色の部分は厚めにむき、その周囲もしっかり皮をむきましょう。

【食べる時】

- 1 未熟なイモや小さなイモはたくさん食べないようにしましょう。そういうイモを皮付きで調理したら、皮は残しましょう。
- 2 苦みやえぐみを感じたら食べないようにしましょう。

詳しく知りたい方は、以下のウェブサイトも参考にしてください。

○農林水産省ウェブサイト

「食品中のソラニン・チャコニンに関する情報」

「ジャガイモ『育ててみよう!』」

○(財)いも類振興協会

「おいもの教材」

